

平成 28 年度第 3 回小学校ゼミナール記録（八島班）

参加者：八島（授業者）、影山（広島大学准教授）、武岡、米山

1. 協議事項

広島大学附属小学校研究大会に向けての授業検討

小学校算数科第 2 学年「ひょうやグラフをつかって」における授業づくり

2. 協議内容

協議は、授業者が事前に作成した学習指導案に対して行われた。対象となった単元は小学校第 2 学年「ひょうやグラフをつかって」である。今回検討した授業は、PPDAC サイクルを 45 分間の授業の中で行うことを目指すものである。本授業では、教師が提示したじゃんけんの結果から、じゃんけんの「くせ」を統計的に調べることを通して、資料を目的に応じて、表やグラフに整理したり、傾向や特徴を読み取ったりすることを目標としている。

協議内容としては、問題の提示方法について、小学 2 年生であることを考慮して、映像を用いて視覚的に示すことや、提示するじゃんけんの結果の数をいくつにするか、どのように分担させるかについてなどが挙げられる。また、本授業においてじゃんけんの「くせ」を扱うが、言葉の選択が適切かどうかの話し合いが行われた。「特徴」や「傾向」、「出し方」等の言葉が挙げられたが、児童の実態を考慮した上で「出し方のくせ」という言葉を選ぶことにした。さらに、そもそも「くせ」とは何か、どこまで踏み込んで扱うのかについての協議も行われた。何を出しやすいか、1 回目に必ず出しているものは何か等、具体的に児童に気付いてほしい視点を挙げたが、明確な結論は出なかった。

これまでの授業に引き続き、本授業では、「何を調べれば『くせ』が調べられるか」ということを児童に考えさせることを取り入れている。また、本授業は、「多様な視点でデータを見ること」をテーマとし、小学 2 年生でもそれが可能であることを示す機会であるといえる。このようにテーマを設定したのは、「統計的な見方・考え方」は、小学校高学年からではなく、早い段階から系統的に育てていく必要があると考えているからである。

3. 今後の課題

今回の協議では、授業の検討をしていく中で、小学校低学年から系統的に統計的な見方・考え方を育てていくべきであるという結論が出た。また、本協議では明確な結論が出なかった、じゃんけんの「くせ」にどこまで踏み込めるのかということや、確率的要素をどこまで考慮するかについても、検討していく必要がある。

（文責：米山 京香，武岡 翔平）